

||||||| 記 事 |||

消 息

群馬メディカルセンター 地域医療資料館

蔵方 宏昌

群馬県前橋市に「群馬メディカルセンター」があり、この中に「地域医療資料館」がある。群馬県内外の医療施設から集めた医療器機と、企画展示として古書や絵画など医史資料が展示されている。

平成4年(1992)9月に開館してから18年、企画展示は20回となる。第1回から第19回までのテーマは「眼科」「産科(腹帯)」「伝染病との闘い」「薬袋、診察券および処方箋、また伊古田純道」「群馬の天然痘」「病氣と祈り——群馬の民間信仰——」「日本の解剖」「クスリ」「医の先人」「会員先生方が所蔵する医学的資料」「医師の業績を称えた『石碑および墓碑』」「昭和30年以前に建築された医院の写真および問取図、案内用の看板」「絵画で見る医療風俗」「野口英世」「医学医療の歴史を変えた医書——西洋編——」「医学医療の歴史を変えた医書——東洋編——」「病草紙と日本人の病」「源氏物語でみる平安時代の病」「外国から医学が入ってきた時」である。

昨年(2010)11月から第20回企画展示として「江戸時代の外科」をテーマに14の小テーマを設けて資料を展示している。

「漢方の外科」では明の薛己^{せつぎ}が著した『外科発揮(薛氏医按)』、江戸時代、漢方・蘭方双方の外科医に大きな影響を与えた明の陳実功著『外科正宗』を展示し、また、漢方医学で外科道具として用いられた九鍼(模型)と九鍼の使い方などを記した本郷正豊の『針灸重宝記』(1749)などを展示し、西洋医学(蘭方)が入る以前の漢方外科を振り返っている。

「オランダ外科の渡来」では『金瘡要術』『紅毛金瘡治験法』『阿蘭陀外科金瘡書』『金瘡口授』の

江戸時代初期の蘭方外科写本を展示。これらの写本は断片的で系統性に欠けるが当時の医師たちが従来の漢方外科と違う外科と製薬に深い関心を持っていたことがわかる。

「オランダ外科の普及」では、元禄9年(1696)に『阿蘭陀外科指南』などが出版され、オランダ外科普及を促進させた様子を伝えている。

オランダ外科書として大きな影響を与えたのは、ドイツのローレンス・ハイステルが著した『外科学』である。「ハイステル『外科学』の影響」では原本の複製を展示し『泰成外科取功』など杉田玄白やその弟子たちが度々翻訳に挑戦し、翻訳書が当時の外科医に大きな影響を与えてきたことを述べている。

ハイステルの外科書は漢蘭折衷派の外科医にも大きな影響を与えているが、「漢蘭折衷派の外科」では『外療仕掛』(写本)と華岡青洲の弟子本間玄調(棗軒)著『瘍科秘録』『続瘍科秘録』を展示し、漢蘭折衷派外科の水準の高さを教えてくれる。

漢蘭折衷派の外科医の中でも、群を抜いているのが華岡青洲である。「華岡青洲の外科」では『瘍科方選』『瘍科方荃』『春林軒処剤録』『春林軒膏方便覧』『瘍科鎖言』の写本を供覧し、乳癌摘出だけでなく、泌尿器科、産婦人科、整形外科と青洲の外科学が幅広い領域に渡っていることを解説している。

また「華岡青洲と全身麻酔」では、岩田三谷『外療秘薬考』や、『乳癌治験録』と『外科処剤録』『青洲先生医話』の写本を通して、青洲が全身麻酔に数通りの麻酔剤(薬)を考案し用いていたことがわかった。

青洲の名声は全国に広まり、青洲の存命中、門人は1,000人を超えたという。「華岡青洲の医塾“春林軒”」では、松木明知著『華岡青洲の新研究』など現代の研究書を展示し春林軒の盛衰と華岡青洲の再発見について述べている。

青洲が活躍していた頃、シーボルトが来日する。「シーボルトと外科」では、現代でも多くの資料や研究書が残っているが、シーボルトは陰囊水腫や腹水の穿刺、腫瘍切除などを行っていた記録が残されている。また外科以外にも眼科や産婦人科の手術も行ってた事を伝えている。

外科から分派したといわれる産科では、賀川玄悦を祖とする賀川流産科が外科的処置を導入した。「外科的処置を行った賀川流産科」では、玄悦の『産論』や、『蘭齋賀川先生口授』『産科内術之弁』（賀川修齋口授）『産科弁術論』『産科奥義秘訣』『香川先生産科口伝』の写本を展示し、胎児が横位や骨盤位などで難産になった時、外科的処置を工夫した賀川流産科の独創性を見せてくれる。

賀川流の回生術が母体のみを救う技術から母児共に助ける技術へと発展し、賀川蘭齋や水原三折が「探領器」を発明して、独自の産科学を樹立する。それと共に産科医たちは「西洋産科学の導入」にも力を注ぎ、西洋の産婦人科を翻訳したり高野長英は「帝王切開」を紹介し、矢田部卿雲の翻訳書を見た伊古田純道は「帝王切開」を行って母体を助けた。また片倉鶴陵（元周）は『産科発蒙』でイギリスの産科医スメリーの著書に載る鉗子分娩を紹介している。

「眼科手術」では、杉田立卿訳『眼科新書』、漢蘭折衷派の本庄普一著『眼科錦囊』佐藤泰然訳『眼科全蘊』(写本)、順天堂の門人・倉次元意識『眼科摘要』を展示し、西洋眼科学と西洋眼科の手術法を紹介している。

「救急医学と軍陣医学」では、漢方医多紀元徳の『広恵濟急方』と漢蘭折衷派の原南陽著『瘦狗傷考』を展示し、卒死者や溺死者を生かす法や蛇が耳、口、鼻、肛門に入った時の処置、虫、獣類、毒蛇、鼠などに咬まれた時の救急処置を紹介している。軍陣医学では、銃瘡の処置などを述べた平野元良（重誠）著『軍陣備要救急摘方』とアメリカの軍陣医学書を訳述した隈川宗悦著『陣中手療治』を展示。西洋の担架の図と雪中で使う「切り抜き目鏡」の図に興味をひかれる。

耳鼻咽喉科の外科として「片倉元周の鼻茸手術」の図を展示している。西洋の胎盤鉗子で鼻茸をつかみ、小筆管に三味線糸をリング状に通して鼻茸を切断する。この絞断法は世界にさきがけて発明したものという。

今回の展示では、漢方と蘭方（西洋医学）を上手に融合させて、独自の外科や外科系諸科を生み出して行った様子を資料で見せてくれる。

場 所	〒371-0022 前橋市千代田町1丁目7番4号
問い合わせ	TEL 027-231-6074 FAX 027-231-6207
入 館 料	無 料
展示期間	平成23年(2011)8月下旬まで